

1, 日本一低い分水嶺

ビート畑が広がる片隅に駐車場がありました。この辺りが日本一低い分水嶺です。日本海と太平洋に流れる分水嶺です。周囲を見回しても嶺は見当たりません。広々とした平地が広がっています。

4.4 万年前支笏カルデラが噴火し、大火砕流が発生しました。札幌の溶結凝灰岩(札幌軟石)、滝野や月寒丘陵の火山灰堆積、そして、美々のこの辺りにも大火砕流が押し寄せました。永い年月の風化作用によつての現在ですが、もっと高いところまで火砕流が達したことであろう。太平洋に流れていた石狩川は日本海へと流れを変えました。その時、出来た分水嶺がこの地です。水は高いところから低いところへ流れます。人間の感覚では分水嶺は分からない。でも、水の流れはこの地帯を境に太平洋と日本海に分かれています。

2, 凄いな！心奪われ声無し

ロープをつたって源流部に下りました。凄いな！心奪われ声も出なかった。葉の天蓋を通して降り注ぐ緑の光、チラチラと点滅する木漏れ日、川面を覆うヌマハコベの緑。すべての音を遮断した沈黙の世界。そんな中に美々川源流部の流れがあった。

3, どうしてこの様な浸食地形が生じたのかな。

火砕流で埋め尽くされた大地に、どうしてこの様な浸食地形が生じたのかな。勢いよく湧き出る湧水が作りました。川底の辺りは水を通さない地層。その上に水を通す火山灰層。雨水は火山灰層に浸透し、水を通さないところにたまり湧水として吹き出し、土砂を流し浸食地形を作り上げました。かつては清らかな水であったが、今はアオミドロが発生していました。養豚所などの汚水が原因でないかとのことでした。この湧水の湧き出る下の地層は水を通さない層でしょう。溶結凝灰岩かな。湧水口から上の火山灰層は、目見当で15~20メートルぐらいかな。

大火砕流で覆い尽くされた大地に一筋の美々川という浸食地形を作ったのは、豊富な湧水に違いないと思いました。(この章は、私の推測で書きました。自然は絶妙だから、もっと多彩な原因があるでしょう。)

4, 心に残ったチョウや植物のこと



(1) ウスバシロチョウ

食草は、ムラサキケマン・エゾエンゴサク

どこでも見られる種ではないとのこと。群舞していました。写真撮影できるほど近づいてくれた。ラッキーでした。

(2) ワタゲカマツカ

詳細は後述



(3) クロビイタヤ

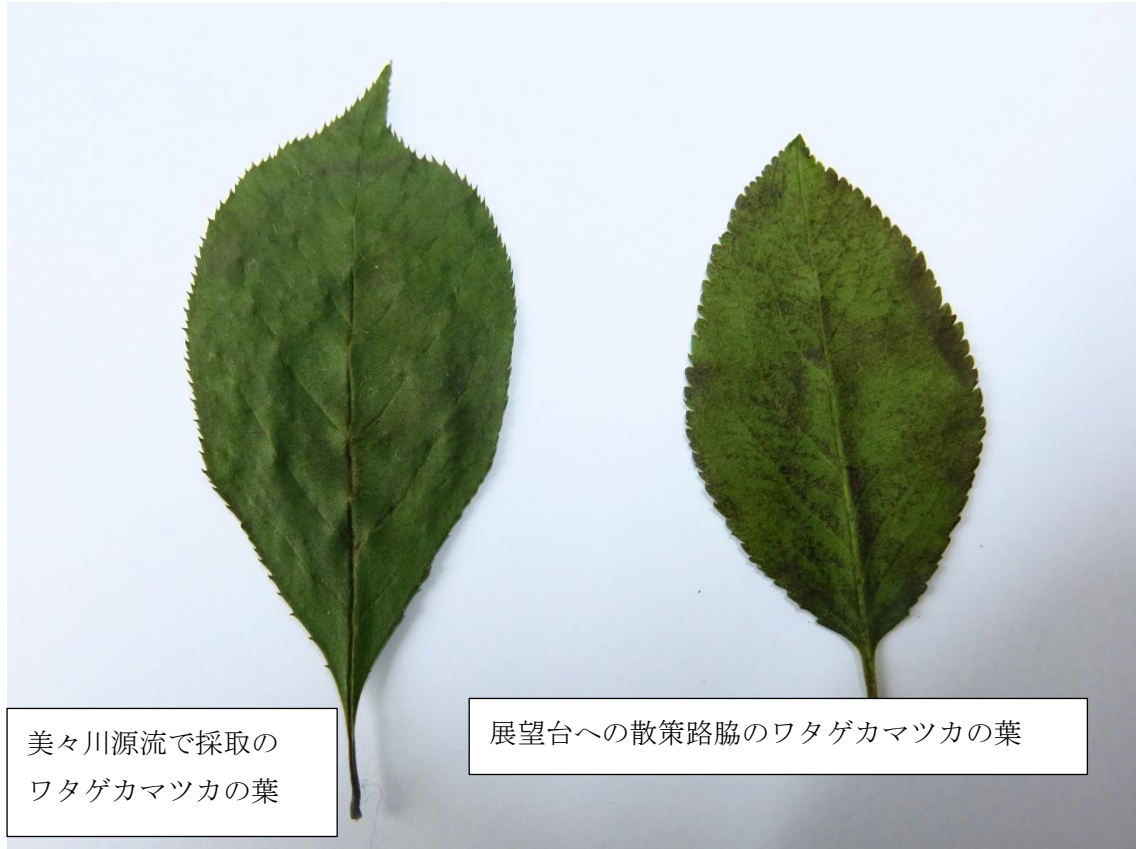
自生しているクロビイタヤを見るのは初めて。

(4) ニンニクガラシ

これは、アレロパシー物質を出して、他の植物に影響を与えるかも知れない。北海道ブルーリストにも出ています。初めて見ました。アブラナ科の植物です。むやみに近づいて種子拡散の役割を担わないことという話がありました。

5, ワタゲカマツカ深読み

ウトナイ湖野生鳥獣保護センターから展望台への散策路脇にワタゲカマツカの花がありました。美々川源流で見た葉と違うのですが、花の柄に毛が見られるとしました。そのことがキッカケで調べてみました。



この写真は、当日採取した葉を標本にして後日撮ったものです。鋸歯の様子が違います。ただわると面白いが難しいですね。

★カマツカについて、昭和 42 年 15 版の牧野植物図鑑には、「うしころし (かまつか)」と出ています。かつては、「うしころし」の名が一般に通じる名前だったのかな。日本名は、「カマツカ、ウシコロシは材がかたくて丈夫で折れにくく、鎌の柄に用いられるので、鎌柄といい。また、牛の鼻に綱を通す時、この木で鼻の障子に孔をあけるので、牛殺しの名がついた」

※「刀の柄 (ツカ) に手をかける」という言葉があるように「鎌の柄 (ツカ)」なんですね。

★平凡社図鑑では、

- ・カマツカ～若枝、葉柄、および葉の裏面中肋上には白色の長軟毛が散生するが、花後には脱落して無毛となる。
- ・ワタゲカマツカ～花の時期まで若枝、葉柄、葉の裏面、花序の軸、萼の外面などに白色の綿毛が密生または密生する。花後に綿毛の多くは脱落するが、無毛にはならない。果

実にも綿毛が一部残存する。

・ケカマツカ～カマツカとワタゲカマツカの中間程度の綿毛のあるもの。

※カマツカ、ワタゲカマツカ、ケカマツカ、これらの3変種を厳密に区別することはできないと思われる。3変種の間で分布や生育地の違いも無い。

★北海道維管束植物目録（APG 分類体系による）では「カマツカ」という名前のみまとめています。

◆APG 分類体系の植物図鑑の樹木編では、どうなっているのかな。本屋の立ち読みで確かめてみたい。